落語三百年

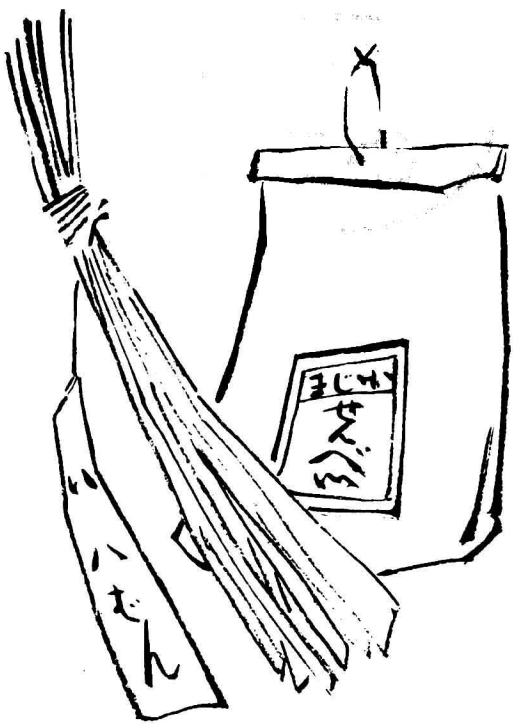
江戸の巻

小島貞二編

毎日新聞社

三百年
の巻

小島貞二編



前座のほまち

小島貞二（こじま　ていじ）
旧制豊橋中学校卒。元出羽海部屋力士。戦後東京日日新聞で相撲，演芸記者を勤めたのちフリーとなり演芸・相撲評論家として活躍。現在日本放送作家協会，東京作家協会会員。著書に「漫才世相史」その他がある。

落語三百年
江戸の巻
昭和41年3月10日　印刷
昭和41年3月20日　発行
定価　380円
編　者　小島貞二
発行者　赤木益一郎
印刷　中央精版
発行所　毎日新聞社
東京都千代田区有楽町
大阪市北区堂島上
北九州市小倉区紺屋町
名古屋市中村区堀内町
<検印省略>

目次

江戸の寄席をのぞく　五
てれすこ　三六
将棋の殿様　四四
今戸の狐　六七
仇討の次第　八四
鍬潟　八八

両国八景　一二
萬歳の頓智　一三三
首売り　一三六
らくだ　一五五
あとがき　二〇七

さしえ　宮尾しげを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

落語三百年

《江戸の巻》

江戸の寄席をのぞく

一

時代を約百三十年ほど前に逆回転させる。昭和の前が大正、その前が明治。さらに慶応、元治、文久、萬延、安政、嘉永、弘化とさかのぼる。そのもう一つ前が天保となる。天保七年が一八三六年。ちょうどそのころの江戸の寄席を、みなさんといっしょにのぞいてみたいと思うのである。

当時、寺門静軒（一七九六年～一八六八年）といういささか世をすねた漢学者が書いた「江戸繁昌記」が、大変に面白いと評判になっていた。その第三編（天保五年刊）が手に入ったので、それをふところに入れて、春の夜の下町をそぞろあるく。その本には寄席の模様がスケッチふうなタッチで紹介されているので、大いに参考になる。

ほとんどどこの町内にも、寄席の一軒や二軒はあるという。あるいているうちにきっとぶつかるだろう。「寄席」……こんな文字をあてはめたのは、ずうっとあとのことで、本当は「寄せ場」

が正しい。ところが江戸っ子たちは気が短い。「おい、寄せへ行こうや」とつめて呼ぶ。いつの間にやら「場」がとんで「寄席」になってしまったのである。しかしここではわかりやすく「寄席」で行く。

通りを行くと、髪結床の看板のすぐわきに「昔ばなし」と大きく書いたビラが目についた。この路地の中に、目ざす寄席があるに違いないと思って、そこを曲がる。

「さァ、おいで！」奥から大きな声がした。そらあった。この「さァ、おいで！」という呼び込みは夜鷹（夜の女）が用いる。そいつを寄席の方でもまねたんだろう。「さァ、いらっしゃい」の方が感じがいいが、しかし、どの商売にも独自の売り声や呼び声があるのだから、とやかくいってもはじまらない。

かなりひろい頑丈な二階家の、ひさしのところに招き（行灯の一種）がぶらさがり、もう灯が入っている。席の名前と芸人の名前が、黒々と浮かび上がっている。前に立っている印ばんてんの若い衆が、路地に足音がきこえるやいなや「さァ、おいで！」と呼び込んでいるのである。

席の名前や芸人たちの名前は、宣伝になるといけないから、ここでは書かない。入口のところには大きな銭箱がどかっと置いてあって、その上に塩が三つまみのっている。花柳街などでもやっている水商売の縁起ものだ。

「いくら？」ときくと、「へえ、四十八文頂きます」という。もっともきかなくっても、木戸銭四十八文とそこに書いてある。

ちなみにその年（天保七年）の江戸酒屋組合の記録をみると「上一升元値一四八文、売前一六四文、中一二一・五文、売前一三二文、下一一六文、売前一二四文」とある。大体、中くらいの酒をスルメでもかじりながら三合ひっかけたくらいの値段だから、そうべらぼうに高くもない。色もの寄席なら、大抵どこでもこのくらいの相場らしい。

払って、下駄をぬぐ。下足番はかなりの年寄りだ。ひもでからげて壁にぶっつけた釘にひっかける。下足札をもらうとき、別に四文払う。

壁のはきものはもうかなりの数だ。中には四、五足一ぺんにからげてあるのもある。帰りしなの混雑のときなんぞ、下足番は片手でひもをパッと引くと、もう四、五足の下駄や雪駄が、キチッと客の足元にそろうという、まるで曲芸師のような芸当を見せてくれる。どこの寄席にもそういう名人がいるものだ。この爺さんもおそらくそうだろう。だから、別に四文は高くない。

と、そのとき、私のあとから入って来た職人ふうの二人連れが、

「おう、爺さん、かんべんしてくんな」

と、履いて来たひやめし草履の底をポーンと叩くと、そのままふところへ押し込んで、トントントンと二階へかけ上がって行った。茫然と見つめている私に向かって、

「あんまり大きな声じゃいえませんがね、あァいうのを、油虫というんでがすよ……」

と、爺さんは苦笑した。油虫とはなるほどうまいことをいう。吉原なんぞではひやかし客のことをやはりそう呼ぶ。ともかく江戸の寄席は、入口からもう笑わせてくれる。客席は二階。かな

り広くゆったりと取った階段を、私もゆっくり上る。

まだ開演にはちょっと早い。しかしそれでも、目勘定でも一束は入っている。一束というのは百人だ。あと一束は入り切るだろう。ところによっては昼間も営業しているようだが、この寄席は夜間だけという。暮れ六つ（午後六時）からはじまるはずだ。

客席をゆっくり見回す。柱があちこちにあるのは、寄席としてあらかじめつくった建物ではなく、貸座敷のふすまを取りはらって、手を入れたものらしい。

向こうの隅ににぎやかな一団がいる。店をしまってやって来た大店の番頭と小僧さんたちと見た。話をしながらせんべいをかじっている。その横で柱によっかかるように、粋な年増が茶をのんでいる。「粋な黒髪見越の松に……」という歌がのちにはやったが、どうやらそういう別宅住まいの女性らしい。そうするとならんでキセルをくわえている上品な老人が、つまり旦那という存在かもしれない。

ほとんどまん中を占領しているのは、五、六人の侍たちである。声高に話し合っては、豪快に笑う。言葉ぐせから察すると、どうも九州あたりの藩中らしい。おそらく今年勤番のつれづれに、江戸土産の一つとして寄席見物にくり込んだのだろう。

両親に連れられた七つ八つの子供も目立つ。かじっているのは豆板かと思ったら、下足札である。親の方も別に注意する様子もない。あまりいいとこの息子でないことはたしかだ。小ざっぱりした印ばんてんに、腹がけ股引きがよく似合う、いかにも江戸の大工という感じの若い衆も三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

人ほどいる。こっちの方は歯切れのいいべらんめえ口調。

赤い顔して妻楊子を噛んでいる遊び人ふうの男もいる。寸のつまったドテラから毛ずねを出しているのは、近くの宿の泊まり客に違いない。

だんだん混んで来る。さきほどの油虫はどこにいるのかと探すと、一番うしろの壁に背中をはりつけて、一人が襟から手だけ出して、鼻くそを掘って丸めていやがる。あんなのを指ではじかれた日にゃァいい迷惑だ。

ともかく、士農工商などという階級意識は、この客席に関するかぎり何もない。みんな笑いという共通の目的のために、同じ銭を出して集まって来ているのだ。

さきほど湯屋できいたうわさによると、水戸の斉昭公が助川に砲台を築いてるそうだ（天保七年五月）とか、どうも農作物の出来がよくないから、このぶんじゃァ米の値段がべらぼうに上がるんじゃなかろうか（天保七年夏以降、諸国飢饉で物価高騰）とか、あんまり明るい話はなかったのに、ここにはそんな眉をひそめるような気配は微塵もない。こういう世相のときだけに、うっぷんばらしでこんなに寄席がはやるのかもしれない。

太鼓が鳴った。さっき鳴ったのが一番だとすると、これは二番。さァいよいよ開演らしい。

二

幕があいた。

高座は三尺ほど高い。広さはタタミ三畳敷きぐらい。いや、そばへ寄ってよく計ったら、あるいはもっと狭いかもしれない。そのためにそなえつけたものではない。檜づくりのそれだけの大きさの台を、そこへ置いたという感じである。

まん中に座蒲団があり、その前の左右に燭台が二本、ロウソクが燃えているから高座の上はかなり明るい。向かって左側、つまり座蒲団のすぐ右に小さな鉄の火鉢があり、鉄瓶もかかっている。そのわきに湯のみと湯こぼしもある。

楽屋ののれんをはねあげて、唐桟の着物を粋に着た、面白い顔の若い落語家が上がって、蒲団にキチッと膝をそろえて、ピョコンと頭を下げた。

手の鳴る客席に、笑顔いっぱいの愛嬌をふりまきながら、鉄瓶の湯を少しくんで、湯気だけをのどに吸い込むようにして、おもむろに口のあたりをたたんだままの手拭で拭いて、

「えー、前座でございますので、ごく馬鹿馬鹿しいところでごかんべんを願っておきます……」

とマクラを二つ、三つ振る。まん中の田舎侍たちが、大声を立てて笑うのを見すますと、すーっと「てれすこ」という落語に引き込んで、トーンと落として、「へえ、おあとがよろしいようで……」と頭を下げた。その前に幕がスーッ。

客は、侍と高座を半分半分に見やりながら、どうっと笑う。しばらく笑いが充満している。

考えてみると、この「前座」という呼び名は根っからの芸界用語ではなく、髪結床からの移入である。

髪結床では主人を親方、弟子を剃出しという。客の乱れた頭に櫛を入れておいて、てっぺんから顎まで剃り、フケを取ってやるところまでを剃出しがやり、あとを親方の手にまかすのだ。その剃出し、つまり弟子のことを別に「前座」とも呼ぶ。それがいつの間にやら、寄席で最初に出る弟子のことを、こう呼ぶようになってしまったのである。

髪結床は湯屋とならんでもっとも庶民的なうわさの集積所。寄席にとっても一番有効な宣伝の場である。自然こうした密接な関係が生まれたのは容易に想像がつく。その一つの証拠に、一、二、三……という数の符丁がある。

ヘイ（一）、ビキ（二）、ヤマ（三）、ササキ（四）、カタコ（五）、サナダ（六）、タヌマ（七）、ヤワタ（八）、キワ（九）……。

これは、昭和の時代になっても理髪店と落語家（というよりも寄席芸人すべて）に共通するというおどろくべき息の長さを誇っている。もっとも、相撲社会にもこの符丁は入り込んでいる。相撲には床山（力士のマゲをあつかう職人）から入ったのだろうといわれる。

余談はさておいて、次の高座は「百眼」が出た。「ひゃくがん」ではなく「ひゃくまなこ」と読む。初代三笑亭可楽（天保四年没）門人十哲の一人三笑亭可上が工夫して、当時色ものの一つとして、大いに人気を集めた珍芸である。

もう少しくわしくいうと、天明から文化にかけてのころ、「七変化」あるいは「七つ目」と称して、吉原の幇間がやっていたのを、可上が眼鏡をもう少し複雑にして寄席にもち込んだのだと

いう。いま高座に上がって来たのは、おそらく可上の弟子か何かだろう。

座って頭を下げて、ふところからおもむろに眼鏡をとり出す。むきだしではない、大事に手拭でくるんである。かなり分厚いものだ。もっとも、眼鏡というのはわかりやすい表現で、実際は「目鬘（めがつら）」と呼ばなければいけない。

膝の前へ置くと、時候のあいさつなどをして、そうして旅の話でしばらく笑わせて、おもむろにロウソクの芯をパチパチと切った。

町内の連中が、富士登山をするという段取りになったところで、ちょいとうつむいたと見る間に目鬘をはめた。厚紙らしいものをダイダイ色に塗り、眉毛を黒く、目は淡青色で描いてある。目の玉のところは小さな穴になっているから、こっちが見えるわけだ。耳へひっかけるところは、紙捻りで輪になっている。

滑稽な顔になったから、どうっと笑いがはじける。一合目を登り、二合目にさしかかるところで、うつむいた顔をあげると、表情がまたガラリかわる。目鬘を一枚ひっこぬいたのである。

三合目でまたかわり、四合目ではもう眉と目がくっつくほどに疲れ、涙まで出ている。あえぎあえぎ登る身ぶりのおかしさに、みんな腹をかかえる。

五合目までやっと来たところで、今まで強がりをいっていた男の方が腰をぬかす。もうこれ以上はとてもいけませんという疲労困憊ぶりを最後の目鬘が示すわけだ。目の表情もクシャクシャで、笑いも頂上に達して終わる。

つまり、目蓋が厚ぼったかったのは、五、六枚を重ねてあったためで、その一枚一枚が割り竹で上からと下からと交互にとめてある。場面転換のたびに素早く引っこぬく。その抜き方が手品師のようにあざやかなところがまたミソなのである。

他愛ないといえばいえるが、見るものとしては結構たのしい。うまく考えたものだ。

これはあとの話になるが、この「百眼」は寄席の高座では間もなくすたれ、歯みがきを売る商人が客寄せとしてうけついだ。幕末から明治はじめのころである。明治になってまた高座に復活、大正に入っても橘家円兵衛（品川の円蔵の弟子）という爺さんがやっていた。お灸をすえてだんだんあつくなる表情などがおかしかったという。それからあとは、もう誰もやらない。

三つ目の高座。また落語である。

前の前座よりは、いくらか年配だ。話の中に与太郎が出て来た。表に打ち水するついでに座敷にまで水をまいて叱られる。客席の小僧にも目がそそがれる。そうして早口で、

「わたし、中橋の加賀屋佐吉方から参りました。へえ、先途、中買いの弥市が取りつぎました七品のうち、祐乗、光乗、宗乗、三作の三所物……」

とまくし立てる。まぎれもない「金明竹」だ。

この落語は、これも可楽十哲の一人、初代の石井宗叔が狂言の「骨皮新発意」から思いついて一席ものにまとめたのだといい、前座の口ならし用に誰もがやる。ところが、いくら舌が回転しても、いってることがわからなければ意味がないので、こうまでやれるのは当然かなりの熟練を

要する。おそらく「二つ目」格の落語家だろう。

余談だが、この落語は幕末のころ上方へ移り、早口のところに大阪弁が入って、内容がさらにおかしくなった。明治のはじめまた東京へ逆輸入して、のちのちまで……つまり昭和の寄席でもきかれるものとなったのである。

三

さて、四高座目。

幕でなく、簾がおりた。簾とくれば「タレギダ」つまり女義太夫にきまっている。若い男たちがひとひざのり出す。場内が何となくざわめく。

「簾をへだてて高座をのぞく」というたとえがある。新しい言い方なら「靴をへだてて痒きを掻く」と同じで、もどかしくってたまらないという奴だ。ちょうどそんな雰囲気だ。

客の中の何人かは、出てくる太夫がお目あてらしい。

チョーンと木（拍子木）が入って、「ザーイ、東西ィ……」と、演ずる段物と、太夫の名が奥からきこえる。

「待ってました、タップリ！」

早くもこちら側からも大きな声がとぶ。木がきざまれて、簾が上がる。

見台に顔をすりつけている太夫。黒い髪に項の白さ。別に見台の匂いをかいでいるのではな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.